様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 24 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2009
課題番号：２０７３０５３１
研究課題名（和文）　いじめ傍観者の被害者への援助抑制理由とその規定要因に関する分析

研究課題名（英文）　Analysis of the reasons why children look on bullying and the factors that have influence on such reasons

研究代表者
久保田　真功（Kubota　Makoto）
富山大学・人間発達科学部・准教授
研究者番号：００４０１７９５

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的は、いじめ傍観者の被害者への援助抑制理由と、その規定要因を明らかにすることにある。
調査は 2 度実施した。第 1 回調査は、314 人の大学生を対象に実施した。分析を行った結果明らかとなったことは、次の 3 点に要約される。第 1 に、大学生の 53.5%が過去にいじめを目撃した経験を有していること、である。
第 2 に、いじめを目撃した者の多くは傍観的態度をとっていること、である。
第 3 に、いじめを傍観した理由は、大別して「いじめへの恐怖」（被害者を多少なりとも助けてあげたいと思いつつも、加害者やあらたないじめの標的となることを恐れている）、「関与の否定」（身近で起こっているいじめを自分と切り離して考え、いじめへの関わりを拒否している）、「被害者への帰属」（被害者に非があると考えている）、「事態の楽観視」（目撃したいじめをそれほど重く受け止めていない）、「快楽的動機」（いじめを見るのを楽しんだり、おもしろがったりしている）の 5 つに分けられること、である。
第 4 に、いじめを傍観した理由には、性別や自分が所属していたクラスに対する否定的なイメージ、被害者に対する印象、過去のいじめとの接触経験が影響を及ぼしていること、である。
一方、第 2 回調査は、697 名の中学生を対象に実施した。分析の対象としたのは、回答に不備にある者を除いた 465 名である。中学生を対象とした主たる理由は、いじめの渦中にある中学生を対象とすることによって、経験が質的に再構成されている可能性を減じられると考えたからである。なお、第 2 回調査では、いじめを目撃した当時の学校生活の様子もいじめを傍観する理由に影響を与えると考え、質問紙にいじめを目撃した当時の学校生活の様子に関する項目を追加した。
分析を行った結果明らかとなったことは、次の 4 点に要約される。第 1 に、中学生の 52.7%がいじめを目撃した経験を有していること、である。
第 2 に、いじめを目撃した者の多くは傍観的態度をとっていること、である。
第 3 に、いじめを傍観した理由は、大別して「いじめへの恐怖」（被害者を多少なりとも助けてあげたいと思いつつも、加害者やあらたないじめの標的となることを恐れている）、「被害者への帰属」（被害者に非があると考えている）、「快楽的動機」（いじめを見るのを楽しんだり、おもしろがったりしている）、「関与の否定」（身近で起こっているいじめを自分と切り離して考え、いじめへの関わりを拒否している）、「事態の楽観視」（目撃したいじめをそれほど重く受け止めていない）、の 5 つに分けられること、である。
第 4 に、いじめを傍観した理由には、逸脱傾向にあることや自分が所属していたクラスに対する否定的なイメージ、いじめに積極的に関与する者の人数、被害者や加害者との親しさ、被害者に対する印象が影響を及ぼしていること、である。なかでも、逸脱傾向にあることは、いじめを傍観した理由のなかでも特に問題視すべき理由ともいえる「被害者への帰属」や「快楽的動機」に影響を及ぼしていた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to examine the reasons why children look on bullying and the factors that have an influence on such reasons.

The questionnaire survey about the contact experience with the bullying in the past was completed twice.

The first questionnaire survey was completed by 314 students of two universities in January, 2007.

The major findings are summarized as follows:

(1) The students who have the experience that witnessed bullying in the past are the whole 53.5%.

(2) "Looking on bullying" is most frequent as action when the students witnessed bullying in the past.

(3) The reasons why the students looked on bullying are divided into five pieces. Firstly, the reason that is afraid of being bullied. Secondly, the reason that is in indifferent to someone other than the self being bullied. Thirdly, the reason that cause of bullying belongs to bullied. Fourthly, the reason that the bullying being witnessed is not so serious. Fifthly, the reason that to see bullying is funny, enjoyable.

(4) "Gender", "Negative class image", "Relationship with bully", "The impression of bullied", "The contact experience with the bullying in the past" influence on the reasons why the students looked on bullying.

The second questionnaire was completed by 465 student of four junior high schools in December, 2009.

The major findings are summarized as follows:

(1) The students who have the experience that witnessed bullying in the past are the whole 52.7%.

(2) "Looking on bullying" is most frequent as action when the students witnessed bullying in the past.

(3) The reasons why the students looked on bullying are divided into five pieces. Firstly, the reason that is afraid of being bullied. Secondly, the reason that cause of bullying belongs to bullied. Thirdly, the reason that to see bullying is funny, enjoyable. Fourthly, the reason that is in indifferent to someone other than the self being bullied. Fifthly, the reason that the bullying being witnessed is not so serious.

(4) "Tending to deviate from school rules", "Negative class image", "Number of children who positively participate in bullying", "Relationship with bullied and bully", "The impression of bullied" influence on the reasons why the students looked on bullying. Especially, "Tending to deviate from school rules" influence on the reason that cause of bullying belongs to bullied and the reason that to see bullying is funny, enjoyable, these reasons are most evil reasons of five reasons.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：教育社会学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：教育学、社会学

１．研究開始当初の背景

いじめ研究が行われた当初（1980 年代）、いじめは日本社会固有の問題として論じられることが多かった。しかし、1990 年代半ばになると、海外にも日本のいじめとよく似た現象（bullying）が見られることが知られるようになってきた。

一方、日本のいじめと海外のいじめとの相違点も指摘されている。いじめの国際比較調査によれば、日本ではいじめの行われる場所として「教室」が圧倒的に多いのに対し、海外では「校庭」で行われるいじめが多い。

このように、日本のいじめの多くは学級を舞台として生じることから、日本のいじめ研究には学級集団に着目したものが多い。それらの多くは、森田洋司らによって提唱された「いじめ集団の四層構造論」を理論的枠組みとしている。

「いじめ集団の四層構造論」では、傍観者がいじめ抑止のキーパーソンと考えられていることから、傍観者の意識に着目した研究も見られる。その目的は、子どもたちがいじめを黙って見ている理由と、それらの理由に影響を及ぼす要因を明らかにすることにある。

これらの研究は重要な知見をもたらしたものの、その多くは架空エピソードをもとにした分析を行っている。架空エピソードを用いることの利点は、いじめの具体的文脈を統制できることにあるが、架空エピソードによって得られた結果と実態とは大きく異なる可能性がある。例えば、森田ほか（1999）によれば、子どもたちが実際にいじめを見たり聞いたりした時の行動で最も多かったのは「いじめにかかわりをもたないようにした」であり、全体の 44.6%となっている（100-101 頁）。これに対し、青木ほか（2002）によれば、第 3 者の行動得点として最も高かったのは「援助性」（被害者を助ける行動）となっている。この結果は、架空エピソードを用いた分析を行った場合、回答者がいじめに対してより望ましいとされる行動を選択肢のなかから選択する可能性を示唆している。

以上を踏まえると、いじめ傍観者の意識を検討するにあたっては、実際にいじめを目撃した経験を有する者を対象にする必要がある。

「引用文献」

青木洋子・宮本正一　2002,「いじめ場面における第三者の行動」『岐阜大学教育学部教育学・心理学研究紀要』第 15 巻，45-58 頁。

森田洋司ほか編　1999,『日本のいじめ―予防・対応に生かすデータ集』金子書房。

２．研究の目的

本研究の目的は、実際にいじめを目撃した者を対象に質問紙調査を実施し、いじめ傍観者の被害者への援助抑制理由とその規定要因を明らかにすることにある。

調査は 2 度実施した。第 1 回調査では大学生を対象に、第 2 回調査では中学生を対象にした。

第 1 回調査の結果は、『子ども社会研究』に研究論文としてまとめている。そこで、以下では第 2 回調査の結果を報告したい。

３．研究の方法

(1) 調査対象

調査対象は、北陸地方の公立中学校 4 校に在籍する中学 1､2 年生の生徒 697 名である。回収した調査用紙には回答が不十分なものがあったため、これらを除いた 465 名の回答用紙を分析対象とした（有効回答率は 66.7%）。男女比は、男子 50.8%（236 名）、女子 49.2%（229 名）である。

(2) 調査の実施

各学校長の承認を得て調査を実施した。実施時期は、平成 21 年 12 月である。調査用紙は、学級ごとに担任教師によって配布された。生徒は、調査用紙を家庭に持ち帰り、自宅で記入した上で封筒に密封し、担任教師に提出することとした。なお、担任教師には、児童から提出された封筒を開封しないよう求めた。

(3) 調査の内容

①いじめを目撃した経験

小学校に入学してから今まで（調査時点）にかけて、“いじめを目撃したこと”があるかどうかを尋ねた。「ある」と回答した者については、いじめを目撃した学年を記入するよう求めた（複数回答）。2 つ以上の学年に印をつけた者については､“もっとも印象に残っているいじめ”を目撃した学年も記入してもらった。なお、複数回いじめを目撃した者については､これまで目撃したなかで“もっとも印象に残っているいじめ”を想定し､以下の質問に回答するよう求めた。

②いじめの加害者・観衆の人数

「加害者は何人ぐらいいたのか」､「“いじめ”を面白がり、はやしたてた者（＝観衆）は何人ぐらいいたのか」について尋ねた。

③いじめを目撃した当時のクラスの様子

いじめを目撃した時のクラスの様子については、森田ほか編（1999）を参照した。項目はいずれも、クラスに対する否定的なイメ

ージを示す内容となっている。これらの項目について「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の4段階で回答を求めた。

④いじめを目撃した当時の生活の様子

いじめを目撃した当時の生活の様子については、福武書店教育研究所編（1980）や白松（1997）を参考にした。項目はいずれも逸脱的な意味合いの強い内容となっている。これらの項目について「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の4段階で回答を求めた。

⑤被害者および加害者との親しさ

被害者との親しさについては、「よく遊ぶ友だち」「ときどき話す友だち」「ほとんど話をしない子」のなかからいずれかを選択するよう求めた。加害者との親しさについても同様である。

⑥被害者の印象

被害者の印象についてはSD法形式の項目を用意し、5段階で回答を求めた。

⑦いじめを目撃した際の行動

いじめを目撃した際の行動については友清（2005）を参考にし、それぞれの項目について「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の4段階で回答を求めた。

⑧　いじめを傍観した理由

いじめを目撃した際に「なにもしなかった」「見て見ぬふりをした」と回答した者に、その理由を尋ねた。項目については山崎（1996）と大坪（1999）を参考にし、それぞれの項目について「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の4段階で回答を求めた。

「参考文献」

大坪治彦　1999,「いじめ傍観者の援助抑制要因の検討」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』第50巻，245-256頁。

白松賢　1997,「高等学校における部活動の効果に関する研究―学校の経営戦略の一視角―」『日本教育経営学会紀要』第39号，74-88頁。

友清由希子　2005,「女子グループ内でのいじめ場面における第三者の体験（1）―行動特徴の質的検討―」『福岡教育大学紀要』第54号第4分冊，153-161頁。

福武書店教育研究所編　1980,『モノグラフ・高校生'80　VOL.2　高校生の生徒文化』福武書店。

森田洋司ほか編　1999,『日本のいじめ－予防・対応に生かすデータ集』金子書房。

山崎洋　1996,「いじめにおける第三者の援助態度を抑制する要因」『日本教育心理学会第38回総会発表論文集』，266頁。

４．研究成果

本研究で明らかとなったことは、以下の3点に要約される。

（1）いじめを目撃した際の行動

いじめを目撃した際の行動に関する項目については、6種類設けた。第1に「加害者にやめるように言った」などの直接的援助、第2に「先生を呼んだ」などの間接的援助、第3に「後で被害者の相談にのった」などの被害者へのフォロー、第4に「なにもしなかった」などの傍観的態度、第5に「はやしたてた」などの観衆的行動、第6に「いじめに加わった」などの加害者的行動である。

これらの行動の出現率について分析した結果、直接的援助や間接的援助、観衆的行動、加害者的行動については、いずれも3割未満であった。被害者へのフォローについては3割を超える項目があったものの、最も多かったのは傍観的態度であり、これらの項目については5割弱ないしは5割を超えていた。

（2）いじめ傍観者の被害者への援助抑制理由

実際のいじめ場面において、子どもたちが被害者を直接的・間接的に助けようとすることは少ない。それではなぜ、子どもたちは被害者を助けようとしないのか。この点について検討した結果、いじめに対して傍観的態度をとった者のなかには、“被害者を多少なりとも助けてあげたいと思いつつも、自分が新たな標的となるのが怖いから”と考えいている者が多い一方で、“被害者にも非があるから”と考えている者も多いことが明らかとなった。

また、いじめ傍観者の援助抑制理由の構造的把握を行うために因子分析を行った結果、「いじめへの恐怖」（被害者を多少なりとも助けてあげたいと思いつつも、周囲の目が気になり、新たないじめの標的となることを恐れている）、「被害者への帰属」（いじめの原因は被害者にあると考えている）、「快楽的動機」（いじめを見るのを楽しがったり面白がったりしている）、「関与の否定」（身近で起こったいじめを自分と切り離して考え、いじめへの関わりを拒否している）、「事態の楽観視」（目撃したいじめを深刻視していない）という5因子が抽出された。

（3）被害者への援助抑制理由の規定要因

援助抑制理由に関する項目について因子分析を行った結果得られた因子得点を従属変数に、いじめを目撃した当時の生活の様子やいじめの状況（いじめを目撃した当時のクラスの様子、加害者・観衆の人数、いじめの当事者との親しさ、被害者の印象）を独立変数とした重回帰分析を行った。

なお、いじめを目撃した当時の生活の様子については、逸脱的意味合いの強い内容からなる7項目を用意し、これらの項目について主成分分析を行った。その結果、「反教師傾向」（教師への反感から授業中に話をするという問題行動を起こしている）、「非行傾向」

（授業をさぼったり、カンニングや校則違反の制服を着たりするなどの逸脱行動をしている）という 2 つの成分が抽出された。重回帰分析を行うにあたっては、これら 2 つの主成分得点を独立変数に投入した。

「いじめへの恐怖」には、所属しているクラスに否定的なイメージを抱いていることが正の影響を及ぼしていた。この結果は、被害者を多少なりとも助けてあげたいと思いつつも、クラスの人間関係が好ましくない場合に、自分が被害者に陥ることへの不安感情から周囲の視線が気になり、被害者を助けようとする気持ちが損なわれることを示唆している。一方、「いじめへの恐怖」には、加害者と親しいことが負の影響を及ぼしていた。この結果は、加害者と親しい関係にある場合に、自分がいじめられる不安が少ないものの、加害者側に感情移入し、被害者を助けようとする気持ちすら生じにくくなることを示していると考えられる。

「被害者への帰属」には、教師に反感を抱いていることや加害者・観衆の人数が多いこと、被害者を挑発的であると感じていることが正の影響を及ぼしていた。教師への反感については、学校生活に起因するストレスを抱えている場合に、被害者の気持ちを思いやる精神的なゆとりが奪われ、いじめの原因を被害者に帰属させる傾向が強まることを示唆していると考えられる。加害者・観衆の人数については、“多くの人間の反感を買うからには被害者にも何らかの過失があるはずだ”という思考が生じやすくなることを物語っていると考えられる。被害者の挑発性については、被害者が挑発的であると感じられる場合、被害者に対する同情の念が起きにくく、いじめの原因を被害者に求める傾向が強まることを示していると考えられる。

「快楽的動機」には、教師に反感を抱いていることや非行傾向にあることが正の影響を及ぼしていた。この結果は、逸脱傾向にある場合、“いじめは許されない”という規範意識が低下し、その場の“ノリ”でいじめを楽しんだり面白がったりする傾向が強まることを示していると考えられる。また、「快楽的動機」には、加害者と親しいことが正の影響を及ぼしていた。この結果は、加害者と親しい場合、加害者側に共感する一方で被害者側への思いやり感情が乏しくなり、いじめを楽しんだり面白がったりする傾向が強まることを示唆している。

「関与の否定」には、所属しているクラスに否定的なイメージを抱いていることが正の影響を及ぼしていた。この結果は、自分の所属しているクラスへの愛着が乏しい場合、クラスメイトへの愛着も乏しくなり、“クラスメイトがいじめられていたところで自分には関係ない”という気持ちが生じやすくなることを示唆している。一方、「関与の否定」には被害者と親しいことが負の影響を及ぼしていた。この結果は、被害者と親しい関係にある場合に、被害者のことが多少なりとも気になり、“関係ない”という立場をとりにくくなることを示していると考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

久保田真功、いじめ傍観者の被害者への援助抑制理由とその規定要因に関する分析―大学生を対象とした質問紙調査をもとに―、子ども社会研究、査読有、14 号、2008、pp.17-28

※　中学生を対象とした調査結果については、報告書を作成し、調査協力校に提出した。また、研究論文にもまとめ、学会に投稿しているが、審査結果はまだ出ていない。

〔図書〕（計 1 件）

久保田真功、第 5 章児童生徒、有本章ほか編、教育社会学概論、ミネルヴァ書房、2010、pp.85-102

６．研究組織

(1)研究代表者

久保田　真功（Kubota　Makoto）
富山大学・人間発達科学部・准教授
研究者番号：00401795

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：